棋士の情景

～勝負の厳かさは、どんな時代も変わらない～

棋士・九段　島　朗

（第11話）

東北への感謝

東北地方での将棋普及は、私のライフワーク。人々のあたたかさは、時を経ても何も変わらない。いつもそう思ってきた。

東日本大震災が発生したとき、交通網が寸断されたこともあり私が当時自宅のあった仙台に戻れたのは、二週間ほどたった頃。そして岩手・釜石に伺えた５月は、東北新幹線が再開し、北上駅からレンタカーを運転してのことだった。

避難所になっていた小学校に、いま棋界でとても輝いている小山怜央四段のご家族がいらした。土橋吉孝支部長や懐かしい方々も。会えて嬉しく、まだ弱々しい笑顔だったにしても、心待ちにしていた再会だった。

怜央くんのお母様は、流されゆく中に木片に掴まって奇跡的に助かったという。同行していた鈴木環那女流三段とお母様は抱き合い、二人泣いていた。帰路、被災地の状態は私たちの知っている三陸の風景ではなかった。

東北に赴く前に、ご自身も阪神淡路大震災で甚大な被害に遭われた谷川浩司十七世名人は私に「被災者の皆様には、頑張らないよう伝えてください」と言われた。気力を張り詰めていても、それだけで被災された方々は長く心身は保てない、実体験に基づいたアドバイスだった。また、震災当時都内にいた私に、羽生善治九段はすぐに東北の将棋ファンへのお見舞いの書面をいただき、その年の秋には、対局と対局の文字通りその間の日に、子どもたちに向けて東北に講演に訪れてくれたことには、感銘を受けた。

長年東北の皆様にいちばんお世話になってきた私に、何ができるか考えた。しばらくの間、被災された方々は生きることが第一で、落ち着いてきた頃に暮らしの営み、そのあとに将棋が役立つことがあれば…その年の秋、困難と思われた「将棋の日」盛岡開催は、多くの方々の熱意により支えられた。着実に人々の日常は前を向き、落ち着きを取り戻していった。東北六県のアマ棋界はみな仲が良く、こうした非常時により強い連帯感を発揮され、この気持ちのつながりは稀有なものだろうと思った。

それから十二年の間に、奨励会や女流棋士の道につながる「東北研修会」が仙台に設立され、多くのイベントが昔のように戻ってきた。小山怜央くんはアマチュアで無類の好成績を残し、プロ編入試験の高い壁も破り、今期からは順位戦に参加し好成績を収めている。彼のプロ入りの祝賀会が岩手で行われて、私も出席させていただいた。祝辞で、順位戦で戦う日を楽しみにしています、と述べたがもちろん激励100％で実際指したい訳ではない（苦笑）。子どもの頃から知っている子と本気にはなれないものだ※。怜央くんの順位戦参加と私のフリークラス転出が重なったのは偶然かな？

※昭和の棋士がよく使っていた言い回し。残念ながら、その言葉通り先輩が本気を出して勝ったケースはほとんど見られない。そもそも本気が出てもどうなのか…。